



# 京大広報

No. 633

2008.4



2008紅萌祭

## 目次

京都大学における就職支援 教育・学生担当 理事・副学長 東山紘久……2586	〈随想〉 医療崩壊から脱するために—医療公営化の必要性— 名誉教授 泉 孝英……2601
〈大学の動き〉 副学長、機構長が発令される ……2588 部局長の交替等 ……2588 オーストラリア国立大学、西安交通大学との 学術交流 ……2592 平成19年度「京都大学総長賞」表彰式を挙 行 ……2592 第1回大阪大学・京都大学・神戸大学連携 シンポジウムを開催 ……2593	〈洛書〉 サイバー空間の最前線から 高倉弘喜……2602
〈部局の動き〉 農学研究科が京都発・食の日本創生に関する 協定を締結 ……2594 横浜において「京都からの提言：21世紀の 日本を考える（第3回）」を開催 ……2594 寄附講座・研究部門の設置、更新、移行 ……2595	〈話題〉 VBL第2回京都電気自動車フォーラムを開催 ……2603 第4回「TOKYO 漢籍SEMINAR」を開催 ……2603 キャリアサポートセンター宇治サテライト、 桂サテライトがオープン ……2604 4月1日より吉田及び桂キャンパスが 屋外禁煙に ……2605
〈寸言〉 自らの進路 梅田貞夫……2600	〈訃報〉 ……2606 〈日誌〉 ……2607 〈公開講座〉 総合博物館 第23回公開講座 ……2607
	〈お知らせ〉 無料法律相談のお知らせ ……2608 農学部総合館中庭デザインコンペ ……2608
	〈遠隔地施設の紹介〉 フィールド科学教育研究センター 紀伊大島実験所 ……2609

京都大学広報センター

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 隔地施設 紹介



### フィールド科学教育研究センター紀伊大島実験所 (<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/oshima/index.html>)

京都大学フィールド科学教育研究センター里域ステーション紀伊大島実験所は、紀伊半島最南端の和歌山県串本町潮岬から東に1.5kmにある紀伊大島中央部(北緯33度28分, 東経135度50分, 標高約100m)にあり、敷地面積は11.75haです。当実験所は昭和12年5月1日に和歌山県東牟婁郡大島村から和歌山県を経て無償寄付され、当地に創設された京都帝国大学大島暖帯植物試験地です。現在、構内には研究棟、講義・実習棟、ガラス温室、系統保存圃、樹冠観測塔などがあります。



紀伊大島実験所の位置

実験所が位置する紀伊大島は台地状で、過去の火山活動によって形成され、その後約1000万年かけて風化した熊野酸性岩類が主体です。島は東西6.3km, 南北3.2kmあり、面積は9.89km<sup>2</sup>です。最高標高は島中央寄りにある大森山の171.7mです。真冬でも18℃もある暖流黒潮の影響を受けて年中温暖で、年平均気温は16.9℃, 年間降水量は2,500~2,600mmです。気候的には暖温帯に属し、漁業を主な生業とする島民が江戸時代から守って来た状態良好な魚付林や、かつて薪炭林として活用してきた照葉樹林に紀伊大島は覆われています。湧き水が豊富で、あちこちに清浄な小川が流れています。里海里山の幸に恵まれた紀伊大島は、名勝「海金剛」, 「天狗岩」, 「金山展望台」などの風光明媚な景観に事欠きません。

一方、実験所内の植生は70年以上保全されたスタジイやヤマモモ、ヤブニッケイ、シラタマカズラなどからなる鬱蒼とした照葉樹林とその林縁および林床植物から構成されています。また、所内の林間ギャップには、観賞用ツバキとウメの品種がそれぞれ50種以上保存されています。実験所全体が和歌山県鳥獣保護区に指定され、鳥類や哺乳類、昆虫類もたいへん豊富です。梅雨にはホタルが飛び交い、晴れた夜空には天の川が丸ごと観望できます。

#### ■教育・研究・研究プロジェクト・社会連携■

フィールド科学教育研究センター理念の3大柱である研究, 教育, 社会連携部分を実行するため、集中型講義と実習, 研究, 長期研究プロジェクトを2003年以来行ってきました。現在のスタッフは准教授が一名です。講義と実習は「森里海のつながりを清流古座川に見る」(全学1回生向), 「植物調査法と実習」(農学部2回生向), 北海道大学と共同の「森里海連環学実習B」(全学向), 「里域植生保全論」(大学院生向)などです。

研究テーマは、里海, 里, 里地, 里山, 里空から構成される里域生態系の起源と系譜, 照葉樹林ならびに黒潮文化圏における里域保全, 自然保護区における異形要素の管理, 里域植物の分類です。昨年はキク科タカサブロウ属の再検討を行い、新種を記載しました。

研究プロジェクトとしては、紀伊大島博物相の史的解明があります。幾多の社会経済的变化や串本大橋架橋を経験した紀伊大島は、その度に生物相が変容しました。昭和初期, 昭和中期および平成初期の植物相データを分析し、変遷様式を考察すると共に、未調査な他の植物群や動物群の把握を行い、紀伊大島生物相の起源と成立を、里域保全と関連させて解明していきます。2004年以来、最優先事項で地域と連携しながら取り組んでいる社会連携プログラムとしての古座川プロジェクトについては以下に詳述します。



## ■古座川プロジェクト■

古座川は、紀伊半島南部に鎮座する霊峰、大塔山(標高1121m)を源流に持ち、緩やかに太平洋へ注ぎ込む、全長が約56kmの水体です。流域は照葉樹林などに覆われ、伝統的な文化構成要素が今なお息づいています。最近、熊野地方の紀伊山地と霊場が「世界遺産」に登録されましたが、古座川流域ならびに暖流黒潮とともに古座川河川水の影響を強く受ける串本湾は共に熊野を構成する風土的基盤の一つです。

昭和31年(1956年)、古座川本流中流部に治水と発電を主な目的とした七川(しちかわ)ダムが完成、供用されました。ダムによる生態系の分断、戦後の流域開発、生活習慣の変容、山林の荒廃、過疎化などが相まって、1970年ごろから古座川の水相が徐々に悪化しはじめました。その結果、所狭しと泳いでいたアユなどの魚族が激減し、河口付近の風味豊かな青海苔が収穫できなくなり、さらに串本の魚貝類や海藻も減少してしまいました。

社会連携プログラムとして、2004年から着手した古座川プロジェクトの目的は、この古座川水系を中心に据え、自然域と里域を合わせた森里海連環学を構築、その過程で得られる連環の現場技術を駆使し、地域と密接に連携しながら、清浄・適正な古座川と串本湾を取り戻すことにあります。

2004年5月には、流域住民のご理解とご協力のもと、古座川プロジェクト説明会を行う機会に恵まれました。並行して8月には「清流古座川を取り戻す会」も結成されました。2005年に入り、古座川の水質調査が清流古座川を取り戻す会と合同で開始されました。同年3月には、同会、古座川漁業協同組合、ダム上流域の七川と合同で「古座川シンポジウム－アユの生態に学ぶ－」を、2008年3月には第6回目を開催することができました。また、2005年7月には、流域住民や自治体と合同で第1回の古座川合同調査を実施、水質、生物相、文化相に関する仮説提示のためのベースラインデータ収集をおこない、現在に至っています。2008年5月には第30回目を迎えます。得られた成果は「古座川合同調査報告書」第1巻、同第2巻として刊行されています。詳細は当実験所HPおよびHP内資料閲覧室をご覧ください。

古座川プロジェクトや古座川シンポジウムからの影響もあり、古座川の水相に対する関係住民の関心もますます広がり、高まりつつあります。2006年1月には、流域住民、各種住民団体、企業、漁業協同組合、森林組合、自治体、議会、当実験所が共通の基盤を有する古座川流域協議会が結成され、活動を続けています。2008年4月からは流域の歴史と現状を、水相を軸に詳細に記載していく「古座川水カルテ」構築計画がスタートします。

森里海連環学的発想を基礎とし、アユがたくさん泳ぐ清流を取り戻し、文化の流れをも本来の位相に再調整するのが、古座川プロジェクトの最終ゴールとなります。古座川プロジェクト第1期作業完了は西暦2055年頃、第2期完了は22世紀初頭の予定です。

皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。



古座川シンポジウムの様子

### 職員構成 教員1人

〒649-3632  
和歌山県東牟婁郡串本町須江1330-1  
電話・FAX: 0735-65-0125  
E-mail: umemoto@za.ztv.ne.jp  
(紀伊大島実験所所長 梅本信也)

### アクセス

- ・公共交通機関利用の場合  
JR京都駅、JR新大阪駅からJR串本駅まで特急でそれぞれ3時間半または3時間。JR串本駅からは実験所へはタクシーで15分、路線バスで30分。
- ・自動車利用の場合  
御坊ICまで高速道路、そこから国道42号を利用し、4時間半。